



対人援助実践における矛盾



著：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

はじめに

前回まで、対人援助学会年次大会（2021）の学会企画ワークショップ「対人援助実践をリポートするさらなる 1 冊」において各登壇者をご紹介してくださった文献を、読者である皆様と共に、追ってまいりました。今回は、その過程を通して私が思ったこと、または、感じたことについて、いくつか述べさせていただきます。

まずは、本当に心から申し上げたいこととして、各登壇者のご理解とご協力への感謝があります。皆さん、本当にありがとうございました。実に大雑把で適当な依頼しかしていなかったにもかかわらず、快く応じてくださり、さらに、実に個性的なアイデアをお出しくくださり、発表してくださり、とにかく感謝の一言です。立場やフィールドは異なれど、対人援助にかかわる「戦友」としての絆を、強く、感じさせていただきました。

「戦友」、といった表現を用いると、いかにも大げさだと思われるかもしれませんが、対人援助実践（実践）にかかわって、あれこれうまくいなくて、もがいた経験がある方ならば、いくばくかご共感いただけるのではないのでしょうか。酸いも甘いも噛み分けて、対人援助と向き合った者たち同士の、不思議な縁というものがある気がいたします。

次に、各登壇者の皆様の文献紹介を経て、実に、いろいろな発見と気づきを頂きました。すでに私も読了済みであった文献をご紹介され、登壇者の話を聞くと、「ええ、そこに注目したの？」とか、「なるほど、そんな読み方があったのか！」といった驚きがあったわけです。そんな予想外な体験って、・・・妙にドキドキするものでして、非常に楽しかったわけでありませぬ。読書って、一人でするものではありませんね。

深い！

また、まったく知らなかった文献がでてきて、「・・・これは読まねば」と思われるわけですね。変なプレッシャーとなります。かといって、その文献をすぐに入手できるわけでもなかったり、入手しても意外と、なかなか手が出なかったり・・・まさに積み本という罪にな

るわけです

これまた深い！

さて、そのような流れをかみしめつつ、今回は、渡辺が取り上げた、図書（2冊のうちの1冊）について触れていきたいと思います。

矛盾

私が紹介させていただいた1冊は、物理学者、松原隆彦先生のご著書です。光文社から2017年に出版された、「目に見える世界は幻想か？物理学の思考法」という本になります。

いくら入門書とはいえ、物理学の専門書です。したがって、その領域に親しい方以外は、ちょっと眉をひそめたくなるような、あるいは、少し敷居の高さを感じるような印象を感じられるかもしれません。

しかしこの本は、ありがたいこと(?)に、物理学の専門書には必然かと思われる数式や難解な図表が、ほとんど用いられていないのです。ただシンプルに、「この世界がどのような仕組みが成り立っているのか」といった疑問や問題について物理学がどう答えるかを、気持ちよく読み進めることができます。

とはいっても、なぜ、対人援助実践と、物理学の本が関係するのでしょうか？

実はわたくしは、物理学におけるある「矛盾」に、「対人援助実践との共通点」を感じているのです。ええ、ここだけの話ですが。

・・・物理学における「矛盾」。

無知蒙昧な素人だからこそ、無責任に言い表せる指摘です。私がこれから述べるのが、本当に「矛盾」といっていいかどうかは、正直、わかりません。

つまり、単なる素人の浅知識に基づく、ちょっとした疑問に過ぎないのです。よって、それが本当に矛盾であるのか、あるいは、そうでないのかという真偽については、本稿では言及しないこととします。よって、ご専門の方々は、どうか以降の内容をご一笑ください。

さて、渡辺が指摘した矛盾とは、ひらたくいうと次の通りです。

すなわち、長い歴史を経て、絶え間ない科学的探究の結果として明かになってきている様々な物理学における自然法則の説明が、更なる理論的追及の中で、その説明の理論的破綻をいくつか生起させている、ということです。

・・・なんだか、自分で書いていても、よくわからない説明ですよ。

またまた深い！



「ある研究で明らかにされた自然法則が、いくつかのエビデンスによって大いに支持されたものの、やがて、更なる研究によって、その法則が実は未完成であることが判明した。つまるところ、局在局所的なものでしかなかった」というのは、実はそう珍しいことではなく、まさに、科学の発展の中で、何度も示されてきた事象だと思うのです。その意味で、「もっともっと研究が進めば、そのような疑問はスッキリと解決する」と理解すればいいのかもしれませんが、光の性質の研究において、それが粒であって波でもあるという説が有力視されるようになったあたりから、そう単純にはいかなくなりつつあるように感じております。嗚呼、もちろん、あくまで個人的な感想です*。

すなわち、量子力学以降の物理学を学ぶとすると、「いくつか生じた矛盾は、さらなる研究によってやがて解決される」というより、「矛盾と指摘できる事象が発見されること自体が常態であって、それら矛盾を、(理論的不和としての) 矛盾のままにしないことのほうが、実は不自然である」とすら感じてしまうようになったのです。

あくまでも、現時点における、そして「言葉足らず」の個人的感想です。

・・・ああ、それにしても、なんてわかりにくい説明だろう。私の記述は。

まさに不快！

話がより迷走する前に、もう説明することをあきらめて、言いたかったことに戻りたいと思います。

つまり、「よくよく学べば学ぶほど、なんだかすっきりしないこと、おかしいことがいっぱいみつかる」ということは、それは、物理学の世界だけの問題ではなくて、「対人援助実践」でも同じではないか、ということを書いたかったのです。

やっぱり深い！

その援助は本当に受益者のためのそれか？

そもそも対人援助というのは、その行為者のため、というより、受益者のために、ということが主眼となって組み立てられ、為されるものです。すくなくとも現代社会では、概ね、そのように考えられているわけです。にもかかわらず、受益者に喜ばれるどころか、嫌がられたり、怪訝にされることも少なくないのが対人援助の実践であったりします。また、受益者から求められたり、あるいは喜ばれる援助こそ、実は中長期的にみて、受益者にとって、さらに行為者を含む社会全体にとって、ネガティブに影響することだって起こりえるのです。

ことはそんなに単純ではありませんが、これってある種の矛盾とっていいのではないのでしょうか？

その援助を、どこで、誰が、どのようにみるのかによって、まったく異なる評価が次々と生じる世界がそこにあるのです。この世界の整合性を、誰かみつけたことはあるのでしょうか？

そんな人がいたら、ぜひご紹介ください！

そんな本があったら、ぜひご紹介ください！

となると、先に記した通り、「矛盾と指摘できる事象が発見されること自体が常態」ととらえ、その解決というより、できる範囲での改善に努めていった方が、行為者にとっても、受益者にとっても良い気すらしてきます。つまり、「すっきりしないことをすっきりしよう」ではなく、「すっきりしないことはよくあることだ。でも、だからといって諦めるのではなく、もうちょっとだけすっきりできるよう、もうちょっとだけがんばろう」を、繰り返すということです。

うーむ、伝わりましたでしょうか？

矛盾という気づきを経て

ぐだぐだと、無責任で、好き勝手なことを語ってまいりました。

もしここに、宮城県ご出身の芸人さんがいらっしゃればきっと、「ちょっと何言っているかわからない」とつぶやくところなのでしょう。

別にいいのです、もし読み手である皆さんもまた、そうおっしゃったとしても。

「ちょっと何言っているかわからない」ということは、私が伝えようとしたことを理解しようとしてそう反応してくださったわけですから、私が伝えようとしたことを受け止めてくださった、という意味で、だいたい言いたいことをわかってくださったということなのでしょうから。

ちょっと何言っているかわからない、というのは、ちょっとは言っていることはわかるけど、という意味であって、そうであって、そうでない、のです。

そうであって、そうでない。これは矛盾？

そうであって、そうでない。これは常態？

そうであって、そうでない。深いのです。

そうでないから、そうである。

そうでないから、そうでもある。

—つづく—

*ちなみに、スイスの研究チームが2015年に、この、光が持つ「粒子」と「波」という二重の性質の可視化に成功しているようです（気になる人は自分で調べてみましょう！笑）。